

## 和辻哲郎と生の哲学

——『ニーチェ研究』を中心に——

湯 浅 弘

—

和辻哲郎の処女作『ニーチェ研究』に関しては、そう多くはないとはいえ、これまでも幾つかの重要な論評がなされてきた。

それらの論評は、大別すれば二つの系列に分類できる。その系列の一つは、和辻のニーチェ論が日本におけるニーチェ受容史をコンテキストとしてどのような位置付けられるかを主題とするものであり、また一つは、和辻の作品全体をコンテキストとして『ニーチェ研究』を位置付けようとするものである。

そのどちらの場合においても、和辻哲郎の『ニーチェ研究』のおおよその位置は既に描き出されている。前者の場合で言えば、ニーチェ解釈としての難点はあるものの、その著作は力への意志説を機軸としてニーチェ哲学をはじめて本格的に主題化した、出

版当時としては画期的な著作であり、個人の欲望の解放を強く主張した自我主義者、本能主義者としてのニーチェという高山樗牛らの明治時代のニーチェ像を覆すものであった、といった理解が提示されている。<sup>1)</sup> また、後者について言えば、『ニーチェ研究』は美と倫理の相克、あるいは芸術と学問の葛藤の渦中にあった青年時代の和辻を象徴する著作として、その後の成熟した和辻の思想と学問とは一線を画する、言わば習作的な色彩を強く帯びた著作であるといった理解が示されている。<sup>2)</sup>

これらの見解は、現在において和辻の『ニーチェ研究』を理解するための、言わば最低限の共通了解事項と言ってよいものだと思う。本論文も基本的にはこうした認識を前提としている。だが、ニーチェ受容史をコンテキストとするにせよ、和辻の作品全体をコンテキストとするにせよ、『ニーチェ研究』には以上の

ような位置付けだけでは括り得ない面もあるが、『ニーチェ研究』に関する従来の論評ではこうした点に対する配慮が相対的に希薄であったように思われる。前者について言えば、力への意志説を中心としてニーチェ哲学を形而上学的に再構成し得た点に和辻の独創があったということはその通りだとしても、なぜ和辻においてそのようなことが可能であったかという点をはじめとして当時の和辻の哲学的営為に内在的に『ニーチェ研究』を解釈している例はきわめて稀である。また、後者について言えば、美と倫理の相克の渦中にあった二十代の和辻と、後年の成熟した文化史家、倫理学者としての和辻との間に断絶があることは疑い得ないにせよ、その断絶の具体相や、また同時に両者間にある連続性をも視野に入れて『ニーチェ研究』を解釈している例は、やはり少数にとどまっていると言つてよい。

おおよそ以上のような意味において『ニーチェ研究』というテキストは、なお多くの解釈の可能性を残しているテキストと見なすことができる。本論文は、『ニーチェ研究』執筆時における和辻と生の哲学、よりの確には和辻自身の生の哲学といった論点に焦点を当てながら、そうした解釈可能性の一端を提示しようとするものである。

## 二

ニーチェ受容史をコンテキストとしニーチェ解釈としての妥当

性を問うという視点から見るとすれば、和辻の『ニーチェ研究』には解釈の手續きに関して幾つかの難点があることにすぐさま気付かされる。まず、第一の難点は、和辻がニーチェ哲学の内容的な変遷への顧慮をしていないことである。これは、例えば、和辻が「権力意志<sup>3)</sup>」という後期ニーチェの概念を軸にその哲学を再構成するとしていながら、『悲劇の誕生』というニーチェの処女作の内容的な記述をその中に無媒介に挿入するといった点に容易に見て取れる。また、第二の難点としては、ニーチェの文章に引用符がないため、和辻自身の地の文章とニーチェの文章とが区別できないという点が挙げられる。これら二点は、厳密な意味でのニーチェ研究としてどう評価すべきかという視点から見た場合、和辻の『ニーチェ研究』の明らかな難点であることは間違いない。だが、視点を変えて、なぜ和辻はこのような解釈の方法、叙述の方法を採ったのかと問うならば、その理由を若年の著者の方法意識の未熟さのみに帰することはできないと思われる。現在のニーチェ研究の視点から見れば解釈手續き上の難点と思われるものも、当時の和辻の問題意識からすれば、さほどの問題ではあり得なかった、あるいはより強い表現を使えば、ニーチェのテキストに対する以上のような処遇は『ニーチェ研究』での和辻の基本的な立脚点を示すものであって、そうした処遇にこそ和辻の『ニーチェ研究』の特性が現れていると見ることもできるからである。

では、『ニイチエ研究』での和辻の基本的な立脚点、その基本的なスタンスとは、どのようなものであったろうか。関連箇所を引用して検討してみよう。

ありのままのニイチエに触れようとする人は、ニイチエに直接ぶつかって行くよりほかに道はない。この研究に現れたニイチエは厳密に自分のニイチエである。自分はニイチエによりニイチエを通して自己を表現しようとした。自分では真実のニイチエを捕らえたつもりであるが、あるいは単に表面を通り過ぎただけであるかもしれない。(『ニイチエ研究』八頁)

眞の哲学は単に概念の堆積や整齊ではなく、最も直接的な内的経験の思想的表現なのである。直接的にして純粋な内的経験とは、存在の本質として生きることの意味する。認識する主体と認識する客体とがあつて、その間に認識の形式に依らざる直接な本質の感得があるというのではない。直接な内的経験をもし直覚と呼ぶならば、この直覚は「生命そのもの」として生きることなのである。もとより「宇宙生命」は不断の創造であるから、直接な内的経験も創造的に活らく。自己表現はこの創造活動である。芸術や哲学は皆ここから生まれる。ところでその材料となつている感覚思惟などもまた同じく根本力の創造活動から生まれたものであるがゆえに、複雑多様に生を彩つてはいるが、それ自らは象徴として生の

本質を暗示しているに過ぎない。(四一頁)

前者は『ニイチエ研究』の序からの引用であり、著作全体での筆者の意図を表明したものと解される。また、後者は『ニイチエ研究』本論全体の内容的な序にあたる「本論第一新価値樹立の原理、第一章権力意志」冒頭の文章であつて、当時の和辻自身の哲学観を表明した文章と解して差し支えないと思われる。

前者の引用文で注目されるのは、和辻が「ニイチエによりニイチエを通して自己を表現しようとした」テキストとして『ニイチエ研究』を特徴付けていることである。「眞実のニイチエ」を捉えようとしてニイチエの哲学を解釈することが、同時に解釈者である和辻自身の自己表現でもあると和辻は規定しているわけである。この規定には『ニイチエ研究』の基本的なスタンスが既に語り出されていると見ることが出来る。

また、後者の引用文でまず目を引くのは、「直接的にして純粋な内的経験」とか「直覚」とか「宇宙生命」といった晦渋な術語が用いられている点で、これらのターミノロジーは『ニイチエ研究』の数年前に刊行された西田幾多郎の『善の研究』を意識して用いられていると推測される。和辻は、言わば『善の研究』を下敷きとして自らの哲学観を語り出し、「眞の哲学」をまずは「最も直接的な内的経験の思想的表現」と規定しているのである。その上で「最も直接的な内的経験の思想的表現」は「直接的にして純粋な内的経験」へ、そしてさらには「存在の本質として生きる

こと」「直覚」「生命」そのものとして生きること」「創造活動」「根本力の創造活動」「生の本質」等へと言い換えられているが、これは、言葉を手放しながら同一の事態を繰り返して語っているものと解される。その同一の事態とは、「直接的な経験も創造的に活らく。自己表現はこの創造活動である。芸術や哲学は皆ここから生まれる。」とあるように、生は創造的働きとして自ずからその表現を生み出す、あるいは生み出さざるを得ないということであり、哲学は芸術とともにそのような生の自己表現の所産に他ならないということである。

おおよそ以上が、後者の引用文に示されている和辻の哲学観の概要である。むろん生と表現という視角から哲学を位置付けるこのような議論だから、『ニーチェ研究』での和辻の基本的なスタンスを云々することはできない。だが、この議論の後すぐさま和辻がニーチェ哲学を「真の哲学」つまり生の創造活動の最も充実した自己表現としての哲学の優れた範例だとしている点、また哲学を生る自己表現と見るといふ哲学観自体がニーチェの哲学観でもあると見なしている点などを考慮すれば、和辻の基本的なスタンスをより鮮明に描くことができるだろう。

端的に言えば、『ニーチェ研究』での和辻は、ニーチェ哲学に含まれている哲学観をニーチェと共有しながら、それを前提としてニーチェ哲学の解釈を行うというスタンスをとっていることが、まず明らかだと言える。しかも、翻って自らの著作に対する先の

和辻の意味付けに立ち戻るならば、「自分はニーチェによりニーチェを通じて自己を表現しようとした。」と書いていた和辻は、ニーチェのテキストを追体験的に解釈する作業を通じて、同時に、真の哲学の営み、つまり自己という生の深みから発する表現としての真の哲学の営みに参与しているとの自己意識を持っていたと推測される。こうした自己意識こそ和辻の『ニーチェ研究』の基底にあって、その基本的なスタンスを特徴付けるものと筆者には思われる。

さて、和辻の『ニーチェ研究』の基本的なスタンスを以上のよう

に特徴付けることが可能であるとすれば、その著作を理解するためのいくつかの展望を得ることができよう。

まず第一は、和辻のこうしたスタンスからすれば、和辻が自らの地の文とニーチェの文との区別にさしたる配慮を払わなかったのも、むしろ当然ありうべき処置であったということである。和辻の意識においては、ニーチェのテキストは、基本的な哲学観を共有する自らと同一化可能なテキストであって、ニーチェにできる限り接近し、ニーチェに成り代わるかのようにニーチェの思考をなぞる叙述が随所に見られるのも、著者と和辻のこのようなスタンスによるところが大きいと思われる。

また第二に確認できることは、『ニーチェ研究』に認められる和辻の解釈のスタンスは後に大正教養主義と呼ばれることになる態度の基本的な心性を示しているということである。先に触れた

ように、和辻はニーチェと共通する地盤に自ら立っているとした上で、先人としてのニーチェとの同一化を試みようとしているわけ、ここには何らかの偉大な先例を撰取、同化することで自らの人格の陶冶、向上が果たせるし、また果たすべきだという大正教養主義に共通する思想の萌芽を読みとることが出来る。

そして第三に指摘できることは、ニーチェと共通の地盤に立つてニーチェ解釈を自己表現として遂行するという意図をもって書かれた和辻の『ニーチェ研究』は、ニーチェの生の哲学の解釈であると同時に、その時点での和辻自身の生の哲学の書でもあるということである。和辻の自己理解によれば、ニーチェのテキストを介して、そしてニーチェとともに彼が参与する「真の哲学」は「最も直接的な内的経験の思想的表現」として「生の本質」から創造されるばかりでなく、そうした自らの出自をも理解している哲学であった。また、それは、表現され、かたちを与えられたものの根源にある創造的な働きとしての「生の本質」を注視し、あらゆる現象を生る表現、生の象徴として読み解こうとする哲学でもあって、これら両様の意味において生の哲学と呼ぶにふさわしい哲学であったと見ることが出来るのである。<sup>6)</sup>

### 三

前節で確認したように、『ニーチェ研究』での和辻の基本的なスタンスは、ニーチェのテキストを追体験的に解釈する作業が、

同時にニーチェを介して「真の哲学」の営みに参与することだとの和辻の自己意識によって特徴付けることが可能である。そして、そのような自己意識のもとに和辻は、同一化すべき範例としてニーチェ哲学を解釈し、それを通じて自らの、とはいえ「真の哲学」という普遍性を持つと想定される哲学——その実質から言えば生の哲学——を描き出そうとしたと解される。

では、なぜ和辻はこのような自己意識を持ち得たのだろうか。また、同一化の対象としてニーチェ哲学が選ばれたこととこうした自己意識との間には何かしら必然的な繋がりがあるのだろうか。前節の内容を以上のように要約すれば、このような問いが自ずから浮かび上がると言えるだろう。

このような問いは、一言で言えば、『ニーチェ研究』での和辻の基本的なスタンスとその内容、つまり和辻のニーチェ解釈、和辻の生の哲学の実質との連関を問おうとするものである。前節で見たように、和辻の基本的なスタンスを特徴付けるキーワードとして機能していたのは、生や自己そして表現といった術語である。だが、あらためて言うまでもなく、それらは権力意志とともに『ニーチェ研究』全体にとっても最も基礎的な術語に属すと見てよい。このようなわけで、生、自己、表現といった事柄に関する和辻の思索を瞥見することで、上記のような一連の問いに対する見通しを得ることができると予想される。

『ニーチェ研究』ではそうした思索はニーチェの権力意志説の解

釈という形で提示されている。そこで、権力意志説に関する和辻の解釈を取り上げ、以上のような問題をめぐって筆者の見解を簡略に纏めておきたいと思う。筆者の見解は大きく二点に大別される。

既に触れたように、和辻の『ニーチェ研究』の特色の一つは権力意志説を機軸としてニーチェ哲学を再構成した点にある。和辻は、ニーチェの書き遺したテキストのうちニヒリズム論でも道德批判でも永遠帰帰説でもなく権力意志説に専ら焦点を当ててニーチェ哲学を解釈しているわけであるが、この明白な事実のうちに和辻の志向は明確に現れていると言つてよい。権力意志説は、和辻にとって他の何にもまして撰取同化すべき範例、同一化すべき対象になり得ていたのである。それは二重の意味においてである。

まず第一には、権力意志説は和辻に対して生と表現のダイナミックな関係に関する洞察を提供したと見ることが出来る。その洞察とは、創造活動として存立する生が、自ずから表現を生み出し、そして表現されたものが、ある場合には生を縛り弱体化させ、ある場合には生の自由な創造活動をより強化するといった生と表現との関係の諸相に関わる洞察であつて、和辻にとって権力意志説は、まず生と表現の諸相に関する理論としての意味を持っていたと見ることが出来る。とりわけ和辻が強い共感を示しているのは、権力意志説においては、生を規制する図式化的凝固的な知性の産物たる認識、道德、宗教等に対して哲学と芸術に生の最も創造的

な自己表現という特権的な位置が与えられている点である。次のような文章にはその共感の強度が明瞭に示されていると言つてよい。

さて権力意志は現前の生としてその刻々たる創造を続けている。しかるに人はその創造の道具として造られた認識によつて、すなわち図式化的凝固的傾向の過多なる堆積によつて、逆に生の創造的活動を阻止しようとする。……(中略) ……すべて最も完全なるもの最も自由なるものは現前の生を通じて活らいているのだ、ただ人が切実な生に遠ざかっているのだ、本来の生に帰れ、そして創造に努めろ——ニーチェはかく言うのである。(五〇頁)

このような文章に、ニーチェの権力意志説から創造への呼びかけを聞き取っている和辻の姿を見て取るのは容易であろう。哲学と芸術という最も創造的な生の自己表現へのこうした呼びかけが『ニーチェ研究』での和辻の基本的なスタンスの形成に関与しているということは、無理なく想定できるところだと思われる。

だが、このように見ただけでは和辻の基本的なスタンスの形成を十分に捉えきえることはできない。以上のような観点のみでは、ニーチェ哲学の解釈が同時に「真の哲学」への参与でもあるという和辻の自己意識の微妙な機微には触れ得ないからで、その点を明らかにするために視線を転じて和辻が撰取同化の対象とした権力意志説の別の面に目を配る必要がある。その別の面とは、生

の形而上学とも呼ぶべき権力意志説のもう一つの側面である。和辻にとつてニーチェの権力意志説は、真実在としての生の力動的なメカニズムに関わる形而上学でもあったと言つてよい。

和辻は権力意志説の、生の形而上学としての側面を素描するのに、まず「ニーチェ自ら生き直接に経験した世界」(四七頁)から筆を起こしている。「ニーチェ自ら生き直接に経験した世界」とは、ニーチェの「最も直接的な内的経験」つまりニーチェの生であるが、その生の核心をなすのは「強烈な統一力として活いてゐる」(四七頁)権力意志、「生々発動して絶ゆることなき活動」(四七頁)としての権力意志だといふのである。和辻はこのように「ニーチェ自ら生き直接に経験した世界」から出発しながら、次いで権力意志が及ぶ範囲を人間の内的経験に限定せずに現実全般にまで押し広げてゆく。「現実の端倪すべからざる多種多様の活動は、人の知能によつて初めて造られたのではなく、最も複雑なしかも最も渾然たる根本の力の発現である。」(四九頁)とは、こうした和辻の議論の動向を端的に言い表しているものだが、以上のような権力意志という概念の外延の拡張の極に現れるのが次のような驚くべき主張である。

ニーチェの謂う所の「自己」はすなわちこの権力意志である。……(中略)……「自己」は直接に宇宙の本質である。この「自己」の意味において初めて「自我」は単なる抽象ではなくなる。(四九頁)

この文章は、意識的自我という表層の自我に対して生の創造的な働きそのものである身体こそが眞の自己であるとのニーチェの言説を下敷きとして書かれたものと推測されるが、最も注目すべき点は「自己」は直接に宇宙の本質である。」とされている点である。和辻は、言わば、人が生の創造的な働きそのものとしての「自己」に化するとき、権力意志として宇宙の本質と通底すると見ているわけで、この点を確認すれば、和辻がニーチェと同一の地盤に立ち、ニーチェ哲学をなぞることでニーチェと同じ「眞の哲学」という営みに参与しているとの自己意識を持ち得た理由も明らかだと思われる。和辻の理解した権力意志説、その生の形而上学は、「自己」即ち「権力意志」即ち「生」即ち「宇宙の本質」といった等式を内含しており、そうした視角から見ると、生そのものは自ずから宇宙の本質を介して同一の地盤に立っている、あるいは立てるはずだというのが、その形而上学の示唆するところである。「ニーチェ研究」での和辻がこのような生の形而上学を背景としてニーチェの営みと自らの営みとの関係を理解していたとしても、それをもはや怪しむ必要はないだろう。ニーチェ哲学の解釈において「自己」を表現しようとした当時の和辻は、創造にいそむることによって自らの向上を繰り返し求めてゆく「自己」たろうとした和辻だったのである。

- (1) こうした理解の代表例としては、次のものを参照願いたい。西尾幹二、『ニーチェ第一部』中央公論社、一九七七年、三九頁―四二頁。西尾幹二、『日本におけるニーチェ研究譜』白水社（ニーチェ全集別巻）、一九八二年、五二五頁―五二六頁。なお、日本におけるニーチェ受容史をコンテキストとして和辻の『ニーチェ研究』を位置付ける試みとしては、他に次のようなものがある。山崎庸佑、『ニーチェ』講談社（人類の知的遺産五四）、一九七八年。川原栄峰、『和辻哲郎』、『ニーチェ研究』、『実存主義』第六三号所収、一九七三年。
- (2) こうした理解の代表例としては、次のものを参照願いたい。湯浅泰雄、『和辻哲郎』ミネルヴァ書房（歴史と日本人四）、一九八一年、一九頁―五〇頁。ただし、この著作で湯浅氏は、日本の伝統への強い関心と顧慮は青年期の和辻に既に認められるとして、その点に関する後年の和辻と、『ニーチェ研究』の和辻との連続性にも注意を促している。前掲書、五一頁―六二頁。
- (3) der Wille zur Macht を和辻は「権力意志」と解しているので、本論文ではこれ以降、和辻の用語をそのまま使うことにする。ただ、筆者個人としては、「力への意志」という訳の方が適切であると考え、前節ではそちらを使用した。
- (4) 『ニーチェ研究』からの引用は以下の版を使用した。『和辻哲郎全集』第一巻、岩波書店、一九六一年。なお、これ以降この著作からの引用は本文中で頁数のみ記すことにする。
- (5) 『ニーチェ研究』への西田の影響が認められるのは、こうしたターミノロジーの類似においてだけではない。この著作における権力意志の解釈の方向性、また著作では明示的に語られてはいないものの当時既に胚胎していた仏教への関心などにもその影響は認められる。また、西田の他にベルクソンやジンメル等の生の哲学、ジェームズなどの影響も認められるが、本稿では和辻のテキスト自体の解

釈に議論を限定しているので、他の哲学者と和辻との異同といった問題に関する具体的な論証は視野の外に置かれている。

- (6) 昭和一七年に刊行された『ニーチェ研究』の改訂第三版の序で和辻が自らの処女作に対する強い違和感を表明しているのはよく知られている通りだが、ここで指摘した三点は、どれもがその違和感を醸成する要因となっており筆者には思われる。後年の和辻が、生と表現という問題系においては無媒介的な生ではなく表現の具体性に明確に定位し、テキストの解釈においては文献学的方法を前提として対象となるテキストとの距離感に関してより自覚的になつていったことは明らかで、後年の和辻から見れば、ここで確認したような特性を持つ処女作が異様なものと映ったとしても当然であったと推測される。

(ゆあさ・ひろし、倫理学、川村学園女子大学助教授)